



TITLE:

宋代役法上より觀たる鄭州廢置問題

AUTHOR(S):

佐伯, 富

CITATION:

佐伯, 富. 宋代役法上より觀たる鄭州廢置問題. 東洋史研究 1939, 5(1): 39-51

ISSUE DATE:

1939-10-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/145665>

RIGHT:

宋代役法上より觀たる鄭州廢置問題

佐 伯 富

の制度が始められ、徵兵制が撤廢せられて募兵制の時代に移つた。

一
鄉役の前身として、古くは漢代に三老、有秩、嗇夫等の所謂鄉亭の職があり、これらは朝廷からは優遇と與へられ、人民からも尊敬を拂はれてゐた。中にはこの中から拔擢せられて中央の大臣に登つた者さへもあつた。^③北魏には三長制があり、これが唐代の里正の前身である。何れも徭戍を免ぜられてゐた。^④そこで唐の初に於ては里正坊正等の鄉役に一人の缺員がある時には希望者が十人もあるといふ有様であつた。^⑤ところが段々時代を経て、鄉役をつとめるとそれが兵役の代徭になるといふ特典が次第に特典でなくなり、里正になる希望者が減少して來た。それは唐代に於ける兵制の變化と關聯をもつてゐる。唐初制定した府兵制度が崩壞して、玄宗の開元十一年には張說の議によつて曠騎

人民は兵役を免除せられることになつたので、これまでの鄉役が兵役の代徭であるといふことそれ自身がもはや魅力を失つて來た。尤も初唐時代、兵役を課せられたのは軍府のある州に限られてゐたが、軍府のない州でも亦鄉役に就く者は課役(租庸調)を免除せられてゐた。府兵制度を豫想することによつて成立してゐた租庸調制は、府兵制度の崩壞と共に大變動を來さざるを得なくなつた。即ち募兵に給する俸給に對して、今までの租庸調以外に臨時的な租税の徵收を行はなければならなくなり、色々の附加税が増して來たが更に中央で認めた附加税以外の附加税も多くなつた。それは府兵制度の崩壞は同時に兵權の地方分散をもたらし節鎮が發生して責任を以て部下を養はなければならな

くなつたからである。そこで附加税が段々多くなると租庸調を免除するといふ事もはや大した恩典でなくなつて來た。兵制が紊亂すると共に税制が紊れて、遂に徳宗の建中元年に兩税法を行ふに至つたのである。かくして租税の事務が廣汎なものになり、同時に煩雜なものになると、これにたづさはる里正等の職務がそれに伴つて重大になつて來た。恩典が減少して任務が増加して來た。それで里正等の郷役が人民から忌避せられて來た。兵役は募兵制により、胥役は金錢を代納せしめ、その金で希望者を募ることにより、それではついたが、郷役の方は租税の世話係といふ大役であるから、これは代理人を立てたのでは間に合はない。そこで差役といふものがあらはれて來た。^⑦以上大體差役が出現するに至るまでの郷役の變遷を述べ來つたので、次に愈々差役改革の經過について述べなければならぬ。

二

近世社會に於ける分業の發達と交通の發展とは互に因となり果となり、物資の流通を旺盛にし、商業がす

さまじい勢を以て進展すると共に、運河に沿へる交通の要衝、或は産業の中心地帯には富と人口とが集中して、都市が雨後の筍の様に勃興した。^⑧大都市の附近にはまた市、鎮等の小都市が發達し、これらが膨脹すると縣に引き上げられた。かゝる都市の發達といふ現象が又近世社會の一特色をなしてゐる。かゝる都市の發展を更に役法上から考察して見るに、都市と鄉村とは著しく不平等であつた。^⑨坊郭の戸には科配^⑩と坊正といふ一種の役が課せられてゐたが、併しこれらの役を郷戸の差役に比べるとはるかに軽いものであつた。そこで鄉村に財産を有する農民の中には重い郷役を免れんがために都會に移住する者さへも出て來た。これらの農民が都會へ移住すると坊郭の戸と同じ取扱ひを受けた。かゝるものが宋代の記録では遙個戸^⑪と稱せられてゐる。これははるかに田地を所有してゐる戸といふ意味であつて、現今の所謂不在地主である。政府では地方の地主が都會へ集中してしまふと、差役が行はれなくなるので、役法の實施上、度々之を禁止してゐる。^⑫度々かゝる禁令が出てゐるところを見ると、一片の禁令では滔々たる社會の大勢は如何ともする事が出

來なかつたらしい。

都會には儲け口が多い上に役法の上からも郷村よりもその負擔が輕かつたので、滔々として人口が都會に集中すると共に、財産も貨幣も皆都會へ集中し、都の開封府が空前の繁榮をした事は東京夢華錄等に見える通りである。かゝる都の繁榮は餘程早くからしく、已に眞宗の時代には平和久しく續き、兼井の民には徭役が及ばず、坐ながらにして厚利を得られるので、開封府には資産百萬なるもの至つて多く、十萬以上の者は比々として皆然りといふ有様であつたと言はれてゐる。それで戸等の分ち方の上から考へても、初め郷戸は九等、坊郭の戸は十等に分けられてゐたが、その中、郷戸の方は實際上では殆んど五等になつてしまつたのに對して、都會に於ては十等までの分ち方が最後まで續いてゐた^⑭。又財産の上から見ても坊郭戸の第五等は郷戸の第三等とつりあつてゐた^⑮。これらは皆坊郭の戸は金持が多く、財産があつても等級が低かつたことを示してゐる。

かく都會が繁盛する一方、郷村は次第に疲弊して郷戸の上戸が没落して行つた^⑯。その一原因は上述の如く

役の負擔が各地によつて不平均であつたこと、殊に都市と郷村とでは著しく差異があつた事に起因してゐる。郷戸が没落すると政府では差役が行はれなくなるので、何とか改革しなければならぬといふ意見が、仁宗の頃から澎湃として起りかけてゐた。後年王安石の新法殊に募役法に對して痛烈に反對した舊法黨の領袖司馬光でさへもその先鋒であつた^⑰。王安石が出て募役法を行はなくとも、第二第三の王安石が出現して、差役法を改革しなければならぬといふ事は必然の成行であつたのである。

三

仁宗の康定元年（西紀一〇四〇）西夏と戦端を開くや戦争景氣に乗じて大商人は莫大なる利益を得た。その利益を土地に投資する。官吏も亦商業行爲を法令では禁ぜられてゐたが、裏面に隠れて商業を營み利益をあげた。土地は利益をあげるに最も確實である。そこでその利益を以て子孫のため美田を買つておく。かやうにして自作農が次第に壓迫を蒙つて佃戸（小作農）が増加してゆく。又農民の中には諸名子戸となり^⑱、或は出

家して徭役を逃れんとする者も出て来る。かくて差役に當るべき郷戸が次第に減少する。又一方戦争が起ると租税の取立て及びその管理、運搬に關して、その任務の重大性が愈々加はつて来るので、里正がその役の過重に堪へかねて没落する。かくして郷村には郷役に當るべき郷戸が加速度的に減少してゆく。没落の最も大きい原因は役の過重といふことである。西夏との戦争は宋の社會の各方面に深刻なる影響を與へた。殊に役法の上ではこの戦争を中心にして諸種の問題が表面にあらはれて來て政治家の口にする様になつた。この頃から役の過重が郷戸を没落させるので、徭役を軽減せんとする議論がやかましくなつた。^{②①}

役を軽減するためには州縣の併廢を行はなければならぬといふことは、當時の政治家の定見であつたやうである。^{②②}中でも後年の舊法黨の鬪將の一人である范仲淹は慶曆三年九月(西紀一〇四三)上奏して、天下には縣邑が多きに過ぎ、而も役が過重で人民が苦しんでゐるから、先づ試みに河南府(故治今洛陽縣)の潁陽・壽安・偃師・緱氏・河清の五縣を廢して鎮となし、郷戸の役の軽減を計り、而して後に之を天下に及ぼさんと

上言したところ、仁宗は之を許可し、翌年、河南府の五縣は廢止せられたが、間もなくどういふ理由か分らぬが又舊に復した。^{②③}かくて折角の改革も中絶して神宗の時代にまでもち越された。神宗は五代分裂の時代以來、藩鎮が各地方に割據して、多く郡縣を置き、虛名を張り自己の疆域を固めようとして、人民を役使し、これがために民が役の繁擾に困窮してゐたことを知つてゐたので早くから州縣を併廢せんとする考へをもつてゐたらしい。^{②④}恐らくこれは王安石の説に共鳴してゐたからであらう。即位すると間もなく、熙寧元年五月(西紀一〇六八)には慶成軍(今山西榮河縣治)を廢し、榮河軍使に入れ河中(今山西永濟縣治)に隸せしめた。州縣の併廢といふことは、當時實際地方政治の衝に當る眞摯なる政治家は、誰しも斷行しなければならぬ當面の重大問題であると感じてゐた様である。^{②⑤}ところが愈々州縣の併廢を斷行せんとすると、商人とか公人(庶人在官の者)等が州縣の併合を願はず、色々と運動してそれを阻止しようとした。^{②⑥}一體それはいかなる理由に基くものであらうか。次に鄭州の廢置問題を考へることによつてその間の事情を究明するであらう。

先に差役法改革の問題が鄉村救済の焦眉の急務であることを述べたが、一體王安石の新法に於ては農村の負擔を輕減するために、坊郭の戸特に坊郭の上戸の利益を抑へた點が多かつた。差役法を改めて募役法を行ひ、鄉村の負擔を輕減するために坊郭戸からも助役錢を納めさせたが、州縣併廢の斷行も結局坊郭の戸を抑へて鄉村を擁護する政策に外ならぬ。坊郭の役人は殆んどすべて鄉村の負擔となつてゐたので、州を廢して縣となし、縣を廢して鎮とすると、役所が小さくなる。さうすると官吏の數が少くてすむ上に役も少くてすむ。そこで王安石は募役法の斷行と共に遂に州縣の併廢をも全國的に思ひきつて決行する事にし、漸次不必要的の州縣を併廢して行つた。²⁶こゝに問題にしようとする鄭州の廢止もかゝる漕運の内に斷行せられるに至つたのである。

これより先、判司農寺（農林大臣）の曾布が奉使の途鄭州を過ぎつた時、州民が州を廢して開封府に合併し畿邑にして徭役の支費を輕減し、民力を充實させても

らひたいと希望をしてゐることを聞き、之を上奏したので、²⁹朝廷でも京西轉運使の吳幾復に命じて、實狀を調査させたが曾布の上奏の通りであつた。そこで熙寧五年八月（西紀一〇七二）鄭州を廢し、管城・新鄭の二縣は開封府に移管し、原武縣を省いて鎮となして陽武縣に入れ、滎陽・滎澤の二縣も鎮となして管城縣の管轄に移した。³⁰王安石の計算によると、これによつて州官十數人、州役四百餘人を省き、一歲に錢數十萬貫を省いた。而も諸縣はこの計算にはいつてゐない。鄭州廢止以前鄭州の役錢額は天下に比して最も重かつたが廢止後は開封府なみになり、天下に比して最も輕くなり、人民は負擔が輕くなり大いに喜んでゐる筈であるが、「鄭人廢州を以て便となさず」といふ噂が神宗の耳にはいつた。³¹執政（參知政事・即副宰相）の吳充は、この理由を「團練たるの時は甚だ熙々たり。節鎮たるによりて故に勞敝す」と説明して居り、蔡挺は「人保甲の上番を畏る。故に畿縣に屬するを畏るゝのみ」と辯じてゐるが、王安石は逐次これらの説に反駁を加へ、吳充に對しては「節鎮となり、添ふる所の職官一員、公人十餘人のみ。此言、是に非ず」と駁して居り、蔡

挺の言に對しても「保甲は上番以來、鄭人投狀して府界に屬せんと欲する者絶えず」と言つて居り、その主なる原因については、「惟ふに是れ、士大夫産を鄭州に置ける者、或は欲せざるのみ。」と云つた辯明を加へてゐる。王安石のいふ鄭州に産を置く者とは王安石を薦舉して呉れた先輩曾公亮を指してゐた。⁽³²⁾ 上述の如き風評も王安石の説明により、その原因が明らかとなり神宗も納得して遂に熙寧五年八月鄭州を廢止するに至つたのである。神宗の在世中は王安石の施政方針に従つて萬政の改革が斷行せられ續行せられたが、神宗が元豐八年三月（西紀一〇八五）に歿し、幼少なる哲宗が即位し、祖母の高氏宣仁太后が訓政を行ふことになる⁽³³⁾と、今まで新法黨に抑へつけられてゐた司馬光を始め主として舊法黨の政治家を任用したので、二十年來神宗と王安石とが辛苦に辛苦を重ねて立案した新法を根こそぎに廢止して、仁宗時代の舊法に返した。かくて王安石によつて廢止せられた州縣も、すべて舊の如く復興せられ、鄭州も亦神宗崩御の年、元豐八年十一月には早くも復興せられたのである。⁽³⁴⁾ 愈々復興して見ると色々不便があり、地方官の中にも其の不便を奏上す

る者があり、朝廷でもその不便を實際氣附いて、少々手加減を加へたところもあつたが、併し復興の政策は一貫して續けられ、これ以後概ね廢止せられることはなかつた。⁽³⁵⁾

五

さきに鄭州が廢止せられんとすると朝廷内部でも吳充、蔡挺等の大臣或は曾公亮等は廢止反對の意見をもつてゐたが、殊に舊法黨の政治家達は州縣併廢の問題に對しては極力阻止しようとした様である。一體それは如何なる理由に基くものであらうか。

抑々州縣等都市の坊郭の戸は皆役を免除せられて居り、都市の役に當る者は皆鄉村の郷戸であつた。州縣が復興せられると大いに弊害を蒙るのはこの郷戸である。⁽³⁷⁾ 然るに商人達は州縣が復興せられると、第一、物資の需要が多くなるので、儲け口が多くなる。⁽³⁸⁾ 又この商人達は多くは政商である。大きな官廳が出來ると御用を承はることも多いので自然利益があがる。更に又この頃の所謂士大夫即ち官吏の性質を考へて見るに、表面は法律で商賣を營むことを禁止せられてゐるが、

實際は親戚の名前を借りて、或は御用商人を利用して裏面工作を施しては商賣にも手を伸ばしてゐた。^③商人と縁故が出来ると、つい商人を保護してその請託を容れ、商人の爲めに政治運動にまで乗り出すことがある。先にのべた曾公亮の鄭州廢止反對の意見もこゝに原因してゐる様である。鄭州を廢止すると商人は大打撃を被つた。神宗の在世中は色々の裏面工作も無駄であつたが、神宗が歿すると直ちに監察御史劉拯、管城縣令周邠等は上奏して鄭州を復活した。^④侍御史劉摯、監察御史王巖叟等も鄭州の復活に對しては力があつた様である。彼等の州縣を復活すべき理由を綜合して見ると大體次の様である。

今天下は泰平の恩にひたること久しく、戴白の老人は兵革を知らざることが久しい。民榮え物多く、平和が続いてゐるから、益々郡縣を増置して之を分治するのはその處を得たといふべきである。然るに聚斂の臣は只役人を輕減し、役錢を收めて附會せんとして、率爾の間に、事體の如何、人情の樂否を顧慮することなく、遂に州縣の併廢を斷行してしまつた。そこで州縣併廢の後には各州縣の距離が遠くなり、而もその間に

は重疊たる山嶺が連り、江河が阻絶してゐるので、遠い者は十數日、近い者でも五六七宿を要しても尙一往來することがむづかしい。訴訟が起つた時、百姓は訴へ出ることが容易に出来ない、租税を納めるのも困難である。又地方の豪強の專横を官司が彈治することも盜賊を捕へることもむづかしい。又人民が死亡屈をすることも、官司が人民を招集することもむづかしい状態にある。そこで人民達は首を長くして只管州縣が舊の如く復興することを希望し、力役を出してまでも公上に奉ぜんことを願つてゐる。州縣を併廢して役錢を省き封樁することが出来ても、州縣を併廢したがために、虧失するところの酒課は更に大きい。酒税の利は甚大で、之を以て充分に備用するに足り、而も政府に於ては少しも侵耗するところがない。かういふわけであるから併廢した州縣は皆舊に復して民に便して欲しいと。^⑤

併し實際にはこれらの官吏達は商人達の手先に使はれて躍らされた様である。鄭州の坊郭の大商人は利害關係を共にせる商人達を語らつて共同戦線を張ると共に、一方では鄭州の農村の貧乏人を仲間に誘ひ入れて

宛も鄭州の人民全體が復興を熱望してゐるかの如くよそほひ、鄭州復興歎願書を轉運司に呈出した。轉運司で却下されると提刑司に歎願した。提刑司ではねつけられると又押しの手で轉運司に願ひ出た。又こゝで却下されると、今度は愈々後宮に運動して鄭州の復興を陳狀し、遂に素志を貫徹したといふのが事實の真相の様である。

かくの如く、商人の勢力といふものが政治に強く反映する。否むしろ、政治が商人の手によつて左右せられるといふ事が近世の大きな特色をなしてゐる。一面から言へばこのことは、商人は朝廷に於て有力なる代辯人をもつてゐることになる。これによつて自己の利益を擁護する。ところが當時の郷戸にはそれが無い。折角郷戸の中から官吏を出してもこの官吏は被治者としての官戸、即ち自分のおかれた境遇の利害に従つて行動するので、結局それは商業を擁護するといふ立場になつて来るわけである。^③かくて諸種の利益は皆大商人によつて壟斷せられ農村には下戸のみが取り残されて貧富の懸隔が段々大きくなる。中流階級が没落して無比の戸と下戸とのみが存在する様な不堅實な所謂近

世的社會相が生れて來た。

かやうにこの鄭州の廢置問題を一例として考へても分る様に、近世になると都市と農村とは利害が一致しない。むしろ相反する場合が多かつた。かゝる都市と農村との相剋といふ現象、それは主として商業の發展といふことによつて初めてもたらされた事象である。これが近世社會の一大特色であり、眞摯なる政治家はこれを如何に變理するかといふ點に政治の重點をおいてゐた様である。

〔補註〕

① 郷亭の職に關しては日知錄卷八「郷亭之職」、俞正燮の癸己類稿卷十一「少吏論」參照。

② 三老に關しては所々にその記載が見えるが、一例をあげると、漢書卷四、文帝紀十二年三月の詔の中に、

三老衆民之師也。(中略)其遺詔者勞賜三老孝者帛人五匹。(中略)及問民所不安。而以戶口率置三老孝悌力田常員。令各率其意以道民焉。

とある。

③ 漢書卷八三、朱博傳には朱博が亭長から進んで大司空になつたことを記して居り、漢書卷八九、循吏傳朱邑の傳には彼が舒桐郷の胥夫から大司農にまで出世したことを記載してゐる。

④ 漢書卷一上、高帝紀二年二月癸未の條。

舉民年五十以上。有修行能帥衆爲善。置以爲三老。鄉一人。擇鄉三老一人。爲縣三老。與縣令丞尉。以事相教。復勿繇戍。以十月賜酒肉。

魏書卷一一〇、食貨志。(通典卷三鄉黨略同)

〔太和十年〕給事中李冲上言。宜準古五家。立一隣長。五隣立一里長。五里立一黨長。長取鄉人強謹者。隣長復一夫。里長二。黨長三。所復復征戍。餘若民。

(魏書卷七下、高祖紀下による)

〔太和十年〕二月甲戌。初立黨里隣三長。定民戶籍。

とある如く、三長制の立てられたのは太和十年二月甲戌である。

通典卷三鄉黨

大唐令。諸戶以百戶爲里。五里爲鄉。四家爲鄰。三家爲保。每里置正一人。(若山谷阻險地遠人稀之處聽隨便量置)。掌按比戶口。課植農桑。檢察非違。催驅賦役。在邑居者爲坊。置正一人。掌坊門管鑰。督察姦非。並免其課役。(下略)

⑤ 文獻通考卷一二、職役考

睿宗景雲二年。監察御史韓琬陳時政上疏曰。往年兩京及天下州縣學生佐史里正坊正。每一員闕。先擬者輒十人。頃年差人以充。猶致亡逸。即知政令風化漸以敝也。

⑥ 胥役とは役所につとめて官吏の驅使に供するもの、これに色々あるが、役所につとめるものと、官吏自身に附屬

するものがある。この胥役は多く上官にこきつかはれて地位の賤しいものであるから、この役に當るのを好まない。金を出せば之を免除されることが出來た。これについては濱口重國氏の「唐に於ける兩税法以前の徭役勞勩」(東洋學報卷二〇、四・二一、一)なる論文がある。

⑦ 文獻通考卷一二、職役考

宣宗大中九年。詔。以州縣差役不等。自今每縣據人貧富及役輕重。作差科簿。送刺史檢署訖。鍊於令廳。每有役事。委令據簿輪差。

⑧ 宮崎助教授「宋元の經濟的狀態」(世界文化史大系九)參照。

⑨ 宋史卷一七七、食貨志役法の條に、

殿中侍御史呂陶言。天下版籍不齊。或以稅錢貫百。或以田地頃畝。或以家之積財。或以田之受種。雖皆別爲五等。然有稅賦錢一貫。占田一頃。積財千緡。受種十石。而入之一等。一等之上無等可加。遂至稅種田頃積財受種十倍於此。亦不過同在一等。憑此差役必不均平。(下略)

とある如く、家の等級をきめる標準が一定して居らず、無比の戸といふ大金持も結局普通の一等戸としての負擔を負へばそれで差役は免れた。ところが普通大金持は皆都會に集中してゐたので、役法上の負擔は結局、農村が背負はされることになつた。宋史卷一七七、食貨志に蘇轍の上言をのせてゐる。その一節に

差役復行。應議者有五。其一曰。舊差鄉戶爲衙前。破

敗人家。甚如兵火。自新法行。天下不復知有衙然之患。

と見えてゐるが、郷戸の没落といふ現象は必然の勢であつた。それは結局同書に

初許兩浙坊郭戸家産不及二百千。郷村不及五十千。毋輸役錢。而郷戸不及五十千。亦不免輸。元豐二年。提舉司言。坊郭戸免輸法太優。

とある如く、都市と農村とで役法上の負擔が大いに異つてゐるといふ事が最も大きな原因であつた。

- ⑩ 科配は又科率（續資治通鑑長編卷四〇・六三・七〇）、科買（長編卷八七・一〇六・一一四、須索（長編卷七一・九三・三〇〇）、祇應（長編七七・二一六・四八七）とも記されてゐるが、大體同じものをさしてゐる。坊郭の戸の役である。政府が坊郭戸に割り當て、政府所要の物品をたゞで納めさせる。その役が科配といはれた。普通都會に於ては商工業者は同業組合を作り、その組合が行、或は作とよばれ、その事業を獨占してゐた。政府はその獨占權を認めて保護する代りに、これに對して物品の調達を命じた。この義務が行役と稱せられた。

- ⑪ 續資治通鑑長編卷三四五、元豐四年五月辛酉。提舉京東保馬霍翔の上言の一節に

民有物力在郷村。而居城郭。謂之遙佃戸。とある。

- ⑫ 續資治通鑑長編卷一一六

〔景祐二年正月戊申〕詔京東西・陝西・河北・河東・淮

南六路轉運使。檢察州縣。毋得舉戸鬻產徙京師。以避徭役。其分遣族人徙他處者。仍留舊籍等第。即貧下戸聽之。

同書卷一二〇

〔景祐四年十一月〕辛丑。詔河北轉運司。如聞。城邑上戸。近歲多徙居河南或京師。以避徭役。恐邊郡寢虛。宜令本路禁止之。

- ⑬ 續資治通鑑長編卷八五、大中祥符八年十一月己巳の條

- ⑭ 宮崎助教授昭和十年度特講「宋代の役法」

- ⑮ 王安石が免役法を行つた時、郷戸からは免役錢、坊郭戸からは助役錢を徴收したが、宋史卷一七七、食貨志役法の條に

〔畿内〕郷戸自四等。坊郭自六等以下勿輸。

とある。畿内の地方では郷戸の第三等と、坊郭戸の第五等とがつりあつて居た事が判明する。

- ⑯ 宋史卷一七七、食貨志に

役之重者。自里正郷戸爲衙前。主典府庫。或釐運官物。往往破產。

とあるが郷戸の没落せる事實はこの頃の政治家の口から無數にあげられてゐる。

- ⑰ 宮崎助教授「宋代の役法」

- ⑱ 詭名子戸については曾我部靜雄學士「宋代の官戸と限田問題」〔文化四、八〕日野開三郎學士「宋代の詭戸を論じて戸口問題に及ぶ」〔史學雜誌四七、一〕参照。

- ⑲ 宋史卷一七七、食貨志

民避役者。或竄名浮圖籍。號爲出家。趙州至千餘人。詔。出家者須落髮爲僧。乃聽免役。

②〇 宋史卷一七七、食貨志に

慶曆中。令京東西河北陝西河東。裁損役人。卽給使不足。益以廂兵。既而詔諸路轉運司。條析州縣差徭賦斂之數。委二府大臣裁減。

とある如く、慶曆の頃から差役輕減の聲がやかましくなり、又實際に輕減もした。差役輕減の問題はこの頃の政治家の最も大なる關心事であつたので、その議論は宋史食貨志、役法の條に各處に散見してゐる。

②① 范仲淹、歐陽脩等の當時の政治家は、皆役を輕減するために州縣を併廢しなければならぬと考へた。歐陽脩の意見は歐陽文忠公集十冊、河東奉使奏章中の「相度併縣牒」〔同前奏狀〕に見えてゐる。

②② 續資治通鑑長編卷一四三

〔慶曆三年九月丁卯〕上既擢范仲淹韓琦富弼等。每進見。必以太平責之。數令條奏當世務。(中略)既又開天章閣。召對賜坐。給筆札。使疏於前。仲淹・弼皆皇恐避席。退而列奏曰。(中略)八曰。減徭役。臣觀西京圖經。唐會昌中。河南府有戶一十九萬四千七百餘戶。置二十縣。今河南府主客戶七萬五千九百餘戶。仍置一十九縣。(主戶五萬七百。客戶二萬五千二百)。鞏縣七百戶。偃師一千一百戶。逐縣三等而垸役者。不過三百家。而所要役人不下二百數。新舊循還。非鰥寡孤獨。不能無役。西洛之民。最爲窮困。臣請依後漢建武六年

故事。遣使先往西京。併省諸邑。爲十縣。其所廢之

邑。並改爲鎮。令本路舉文資一員。董權酤關征之利。

衆人煙公事。所廢公人。除歸農外。有願居公門者。送

所存之邑。其所在邑中役人。卻可減省歸農。則兩不失

所。候西京并省稍成倫序。則行於大名府。然後。遣使

諸道。依此施行。仍先指揮諸道防團已下。有使州兩院

者。皆爲一院。公人願去者。各放歸農。職官廳可給本

城兵士七人至十人。替人力歸農。其鄉村耆保地里近

者。亦令併合。能併一耆保管。亦減役十餘戶。但少徭

役。人自耕作。可期富庶。(明年五月己丑。施行。)(中

略)上方信嚮仲淹等。悉用其說當著爲令者。皆以詔書

畫一次第頒下。獨府兵輔臣共以爲不可而止。

②③ 宋會要方域一二(長編卷一四九、宋史卷一七七食貨志大略同)

仁宗慶曆四年五月二十八日。省河南府潁陽・壽安・偃師・緱氏・河清五縣。並爲鎮。令轉運司舉幕職州縣官使臣兩員監酒稅。仍管勾煙火公事。尋復舊。時參知政事范仲淹以天下縣邑之多役衆而民貧。故首自河南府省之。

②④ 續資治通鑑長編紀事本末卷七七、州縣廢復

熙寧元年五月〔據拾補戊戌〕廢慶成軍。入滎河軍使。隸河中。(舊紀。上謂輔臣曰。天下自五代分裂。擅據一方。多置郡縣。以固疆圉。由是。役繁民困。其議併省之。于是廢慶成軍。)(長編拾補卷三、略同)

②⑤ 續資治通鑑長編卷二一四

〔熙寧三年八月甲戌〕權河北監收使周革言。本朝建黎陽爲通利軍。調度賦役與古不殊。而戶口比古幾十分之一。民困於力役爲甚。乞廢軍爲縣。還屬衛州。從之。

〔舊紀於月末書。廢通利軍。新紀不書。〕於是上謂執政曰。河北大抵立州縣太多。王安石因論。秦用小邑并大城。卒以致疆。及唐築三受降城事。且曰。今市人公人不願併合。併合即多進狀。朝廷人多從之。已併復析者非一。小人狙見如此。所以每併一縣。輒言不便。凡言不便。多是近縣解有資產豪宗及公人而已。朝廷若能察此。則河北州縣可併處甚多也。上問唐河北州縣。安石曰。唐時或是藩鎮欲張虛名。縱唐州縣亦不足問。但計方今利害何如爾。〔陳瓘輕北重南之論當附見。〕

②⑤ 參照註②⑤

②⑦ 參照註④②

②⑧ 州縣併廢に關する記事は皇宋十朝綱要卷八「廢置升改州府」續資治通鑑長編紀事本末卷七七「州縣廢復」の條にまとめて記載せられてゐるが、長編にも卷二二二から卷二七〇に亘つて記載せられてゐる。〔熙寧の初めの部の記載は長編拾補卷三より卷七にかけてである。〕

②⑨ 續資治通鑑長編卷二三七、熙寧五年八月辛巳の條

先是。判司農寺曾布奉使過鄆。以吏民乞廢州狀奏聞。乃下京西相度。轉運使吳幾復等奏。廢州爲縣。罷諸條役支費。實寬民力。兼審問民吏。實皆樂從。〔長編紀事本末卷七七、略同〕

③⑩ 元豐九域志卷一。長編卷二三七、熙寧五年八月辛巳の條

③① 續資治通鑑長編卷二三七、熙寧五年八月辛巳の條

〔上略〕上又問執政曰。聞鄆人不以廢州爲便。然否。王安石進曰。此乃鄆民吏自乞。又屬王畿。則諸事優便。所省錢一歲幾十萬緡。省州官十餘員。鄆州州役省四百餘人。諸縣復不在是。此兩州〔鄆滑〕止公使庫逐年破壞入產。自不可勝言。不知何緣廢州。乃於鄆人不便。又此兩州出役錢比天下爲最重。若廢即出錢如府界。比天下爲最輕。惟是士大夫有置產在鄆州者。或不欲爾。安石所稱置產。蓋指曾公亮。

③② 續資治通鑑長編卷二三七、熙寧五年八月辛巳の條。

③③ 續資治通鑑長編卷三六一

〔元豐八年十一月壬寅〕復管城縣爲鄆州。以監察御史劉拯及縣令周邠有請也。〔舊錄云。熙寧初。鄆之吏民。以條役供億。公私疲弊。願省爲畿邑。詔從其請。至是。監察御史劉拯及邑令周分有請也。〕〔下略〕

③④ 續資治通鑑長編卷四〇七、元祐二年十二月丙辰、復漣水軍の條の原註に

趙俛行狀。初元豐間。務省條役。嘗併廢郡邑。自後稍或改復。於是。漣水軍亦求復軍。而靈壁鎮又已陞爲縣。俛以廢興郡邑。非有大利害不得已者。何必改作。今復軍立縣。則必增置官吏。遷易戶稅。擾費甚重。雖城郭之民。利在交易。而農民實被其害。乃獨上奏論之。請如先帝詔。且罷靈壁。由是。復罷靈壁縣。而漣水止立軍使焉。

とある。

④⑤ 續資治通鑑長編卷三六五

〔元祐元年二月乙丑（綱要作癸亥）〕詔。併廢州縣。令諸路轉運・提點刑獄・提舉常平司。同相度合與不合廢併以聞。（玉牒。乙丑。詔諸路。相度廢併州縣。）（長編紀事本末卷七七同前。皇宋十朝綱要卷一二、略同）

③⑥ 參照補註④③

③⑦ 參照補註②⑦

③⑧ 參照補註④②

③⑨ 宮崎助教「宋代の役法」

④① 參照補註③③

④① 續資治通鑑長編卷三六五、元祐元年二月乙丑、侍御史劉摯、監察御史王巖叟の上言である。（長編紀事本末卷七七大略同）

④② 續資治通鑑長編卷四〇七、元祐二年十二月丙申、臣僚の上言中に

臣愚竊謂。興復州縣。若別無大利害。則惟坊郭近人〔二字長編紀事本末作近上是也〕人戶便之。鄉村上戸乃受其弊也。何以知其然也。州縣既復。則非邑盛。而商賈通。利皆歸於坊郭。此坊郭上戸。所以爲便也。復以〔長編紀事本末以作一是也〕小邑。添役人數百。役皆出於鄉村。此鄉村上戸。所以受其弊也。自元祐元年二月九日降勅相度幾二年矣。其利害明白而不可以不復者。令下之初。皆已復矣。其可以復可以不復者。仍遷延至今。彼坊郭上戸。倡率同利之人。誘鄉村之下戸。共爲陳請。轉運司不從。則訴於提刑司。提刑司不從。則訴

於轉運司。前官不聽。則訴於後官。必至於復而後已。故遷延至於今日。而復者皆非利害明白不可以不復者也。況自朝廷行差役法。中外莫不以爲宜。而論者獨以地薄民貧之邑鄉村。應役之戸不多者。難得番休爲患也。此雖州縣所在利害不同。要之。役人不可以更有增添。乃天下之所同也。今諸路方且鑿緣前歲一時指揮。而復縣不已。增鄉村〔長編紀事本末村作戸〕之力役。以利坊郭。臣竊以爲非便也。臣欲望。聖慈特降〔長編紀事本末降作賜〕指揮。其元祐元年二月九日勅。更不施行。從之。

④③ 宮崎助教「宋代の役法」に於てかくの如き意味のことを論ぜられた。

（七月二十二日稿了）

〔附記〕鄭州の廢置問題について曾て恩師宮崎助教が昭和十一年度特講「宋代の役法」に於て指摘せられたことがある。それによつて蛇足を加へてみたのが本稿である。第一章、第二章は殆んど同助教の高説、或は引用文までも拜借して論をすゝめた。その他にも高説をそのまゝ拜借した點が多い。特記して感謝の意を表する次第である。